

豊かな島はどこに

人間の長年の営みは文化や歴史として蓄積され、そして最終的に街や都市として「形」になる。ローマやパリの街はその都市の文化や歴史を美しく体現している顕著な例であり、

世界のどの街も地域の文化や歴史を表していると考えていい。

わたしたちの住む沖縄は、祖先が長年かけて造り上げた建築や街のすべてを沖縄戦で失った。古文書によると、沖縄のかつての建物や街は亜熱帯島しょ地域の気候風土を生かした

「環境共生型」の豊かな島であったという。しかし、その建築文化や街づくりの作法は残念ながら戦後伝承されることがなかった。

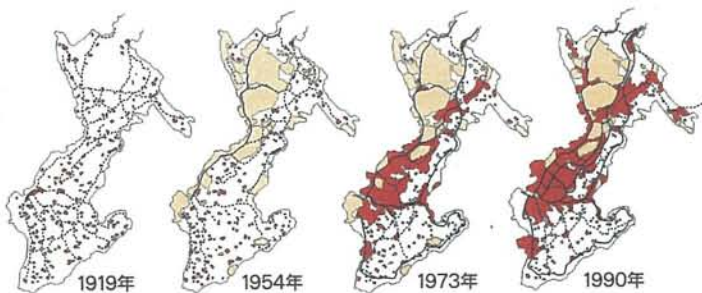
米軍占領下では、新しい理念による計画的な建築づくりや街づくりもできず、ただ開放された地域にコンクリートの建物が造られ、街ができた。そして、本土復帰後は開発のスピードが一層速まり、海が埋められ、山が削られて、豊かな自然を壊しながら都市は拡大し続けたのである(下図参照)。

後追い整備の結果

そして今、子孫に残すべき社会資本として、多大な努力と資金で建設されたわたしたちの住む街に、今なお多くの住宅・都市・交通・景観問題や建物そのものの問題が解決されずに山積していることを見ると、複雑な思いになる。つまり、無秩序に拡大(スプロール化)した地域に、道路・公園・学校・下水道などの公共施設を「後追いの都市計画整備」しているのがあまりに多いのである。

また、最近、大きな問題となっているのは、半永久的に耐久性があるとされたコンクリート建物の構造そのものが二十〜三十年で劣化し、耐久性がなくなり、身近な住宅や学校を建て替えずに得ないケースが増えていることである。

ヨーロッパの都市の多くは厳しい都市計画の下で街が計画的につくられてきた。しかも建物も厳しい規制の下で建設され、街並みへ



市街地と軍用地の返還

1919年当時、集落はまだまばら。1972年の復帰を境にして、沖縄本島の都市化は急激に進んだことが分かる。わずか数十年で、これほどまで変ぼうするとは、だれが予想しただろう

まちは歴史の蓄積

沖縄独自の建築・街づくりが課題



▲赤瓦やヒンブンなど懐かしさを覚える風景
◀現在の市街地。無秩序に都市化が進む



の対応などの義務を負う。また、建物も石造・レンガ造などが多く、内外装の改装や手入れをして日本の建物よりはるかに長く使用するのである。

つまり、街づくりにおいては個人の自由よりも社会性が優先し、半永久的な社会資本として美しく住みよい街を子孫に残すことが第一の目的と考えられているのである。

環境を考える時代

今、沖縄では、戦後建設された建物の建て替えが急速に増えている。街づくりや建築づくりにおいても「スクラップ・アンド・ビルド」の時代は終わり、環境保全・省エネ・長期利用を考える時代となっている。沖縄においては広大な米軍基地

の存在が都市計画、大きな障害となっており、また、台風・塩害・強い日射など建物にとって厳しい気候条件もある。

しかし一方で、亜熱帯気候の温暖な島しょ地域にある沖縄は、今なお日本本土とは異なる歴史・文化・芸能が祖先から現代まで脈々と受け継がれ、新しい活力も生まれつつある。今ここで、大切なことは、沖縄独自の新しい街づくり、建築づくりの指針をつくり出し、

「形」として創造することであろう。子孫に残せる社会資本としての街づくり、建築づくりを目的として沖縄の「再生」を考える時期にあると思う。

今回は、老朽化した団地再生の現状を取り上げる。

(チーム・ドリーム代表